

資 料

A 大学の保育所実習（小児ふれあい実習）前後での
看護学生の対児感情の変化

浅野 梨子¹⁾，佐々木啓太²⁾，谷口 育²⁾
葛西茉莉聖²⁾，川崎 公暉²⁾，涌水 理恵³⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、A 大学小児ふれあい実習（以下、保育所実習）を通じて看護学生が子どもに抱く感情がどのように変化するのかを明らかにすることだ。保育所実習をおこなった看護学生 71 人のうち同意の得られた 46 人（64.8%）を対象とし、実習前後に自記式質問紙調査を実施した。実習前・後のデータが揃っている 40 人（有効回答率 87.0%）を分析対象とした結果、「子どもが好きか」に、「はい」と回答した看護学生は実習前が 95%、実習後は全員であった。実習前の不安に関する問いに対し、80% が何らかの不安を抱いていると回答し、実習後に「子どもと納得のいく関わりができたか」、「不安に感じていたことは解消されたか」という問いに対し、看護学生全員が「はい」と回答した。看護学生の対児感情評定尺度得点の平均値は、接近感情「あたたかい」、「うれしい」、「しろい」、「あかるい」、「やさしい」、「すばらしい」で有意に上昇し、回避感情「よわよわしい」、「わずらわしい」で有意に低下し、回避感情「はずかしい」で有意に上昇し、拮抗指数の有意な低下が示された。保育所実習を通じて子どもとふれあう体験は、青年期の看護学生にとって対児感情の拮抗指数の低下、すなわち、子どもに対する感情の対立を和らげたと考察できた。また、看護学生らの子どもに対する感情や関わり方に前向きな変化がみられ、今後の小児領域での臨地実習や看護実践にむけての意欲的な姿勢が形成されたといえる。

Key words：看護学生，小児看護学実習，対児感情，保育所実習

I. 目 的

令和 4 年の国民生活基礎調査¹⁾によると、我が国の世帯数は年々増加し、世帯の構成員数は減少している（2022 年：2.25 人）。この結果が意味するところは、「単独世帯」や「夫婦と未婚の子のみの世帯」、「夫婦のみの世帯」などの増加および「高齢者世帯」の増加であり、日本国内の少子高齢化、核家族化が顕著に反映された結果であるということである。同様に、国民生活基礎調査の「児童数別、世帯構造別児童のいる世帯数および平均児童数の年次推移」では、児童のいる世帯における児童数「1 人」の割合は増加し、「2 人」「3

人以上」の割合は低下している。地域でのつながりも希薄となっている現代社会の社会的背景において青年期である大学生が子どもと関わる機会は家庭内外においても少なく、「子ども」という存在とふれあい、知る機会は少なくなっていることが容易に想像できる。

これから看護師となるために学ぶ看護学生は養成機関において専門科目として「小児看護学」を受講し、小児分野の臨地実習を経験する。小児領域における看護を展開していくためには小児の成長発達や発達段階などを加味したうえで患者の状態をアセスメントして看護を展開していくことが求められる。笠井ら²⁾は、小児看護学実習に臨む看護学生は子どもと関わることに

Changes in Nursing Students' Feeling toward Children before and after A University's Practice at Nursery

Riko Asano, Keita Sasaki, Iku Taniguchi, Marise Kasai, Naoki Kawasaki, Rie Wakimizu

1) 筑波大学医学群看護学類（大学生）

2) 筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群（大学院生）

3) 筑波大学医学医療系発達支援看護学/小児保健看護学分野（研究職）

〔JCH-24-034〕

受付 24.10.10

採用 25. 6. 4

戸惑いを感じながらも、ケアの必要性を認識すればケアを遂行するために子どもの側に行くという対処行動をとり、関わりたくなる子どもの姿を認識すれば子どもをかわいいと思えることにつながり、戸惑いに対する学生の対処行動は後押しされると述べており、実習における子どもと学生との相互関わりの中で、学生の対児感情は変化し、行動にも影響することが示唆されている。大学生の子どもへの関心とその関連要因について調査した扇原と村井³⁾の調査によると、子どもへの関心は幼児との接触経験により促進されることや保育学専攻などの子どもと関わる学問を専攻する者で高いことが明らかとなっている。このことから看護学生が小児領域の実習に積極的に参加し、子どもの看護を考えるためには子どもとの実際のふれあいからその成長発達の過程を理解することが重要である。

1950年代にブルームらによって提唱されたタキノミーでは、知的活動に関わる教育目標である「認知領域」における教育目標として「知識」、「理解」、「応用」などの分類があり、段階ごとに目標が定められ教育が行われる⁴⁾。看護学における小児領域の教育では、専門科目の概論により得た子どもの看護に関する知識を小児看護学実習の場での応用につなげるために演習などで理解することが求められる。

厚生労働省の『看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン』⁵⁾において小児看護学は、その留意点として「成長発達段階を深く理解し、さまざまな健康状態にある人々および多様な場で看護を必要とする人々に対する看護の方法を学ぶ内容とすること」が求められている。A大学では3年次看護学生を対象に小児ふれあい実習という保育所での臨地実習（以下、保育所実習）をおこなうが、その目的として「子どもの成長への働きかけ、健康で安全な生活を遂行するにあたって、看護職をはじめとする専門職業人がどのような役割を果たしているのか、各職種間また対象の家族や地域社会とどのように連携を取って対象を育てているのかについて理解を深めること」が掲げられており、看護学生らは、病棟での臨地実習に先立ち、小児の成長発達について本実習で深い理解を得ていると考えられる。

看護学生が子どもと関わる機会が少ない昨今において、彼らが小児看護を実践するために「小児の成長発達（身体的・心理的特徴）に関する情報」を実際の子どもとのふれあいから知る機会も同様に少ないことが

想定される。そこで今回、A大学で行われる保育所実習で、子どもとの関わりが少ない看護学生が子どもを受け持ち、対象を理解することで、子どもに対して抱く感情にどのような変化をもたらすのかを明らかにし、その後の小児領域での臨地実習や看護実践にどのような影響をもたらすのかを考察するために調査を実施した。

II. 方 法

1. 対象と実習概要

本研究の研究対象は、A大学3年次看護学生71人である。

A大学の3年次看護学生は、毎年8月から9月の間に3日間の保育所実習をおこなう。看護学生らは前述の実習目的に沿って、保育所の児を一人受け持ち、児の登園から午睡導入まで関わる。最終日には「受け持ち児の概要紹介と看護学生らによる相互質問（1時間）」と「子どもの権利についてのテーマカンファレンス（1時間）」をおこなう。

2. 調査方法

上掲3年次看護学生71人に、本研究の目的と倫理的配慮について説明し、46人から研究協力への同意を得た。

記名式質問紙による調査は、2023年7月の保育所実習前と、2023年9月の保育所実習後に実施した。同意を得られた看護学生に対し、実習前の質問紙は、保育所実習オリエンテーションで配布し、その場で記入・提出を依頼したが、オリエンテーションをおこなった部屋の使用時間制限上、その場で記入・提出できなかった看護学生が若干名おり、彼らへは記入済の事前質問紙に関して、学内に設置されている学生専用ポストを代替の提出場所として案内するメールを送信した。実習後の質問紙は、実習後のカンファレンスにおいて配布し、その場で全数の提出を確認した。

3. 調査内容

実習前の質問紙では「子どもは好きですか」、「日ごろ幼児と関わる機会がありますか」、「子どもとの関わりは得意ですか」を尋ねた。「日ごろ幼児と関わる機会がありますか」については毎日/ときどき/関わらないの3件法で回答してもらい、毎日/ときどきと回答した看護学生に対しては、「どのようなシチュエーショ

ンで関わりますか」と尋ね、妹弟がいる/保育施設などでアルバイトしている/その他から回答してもらった。さらに「保育所実習で(子どもとの関わりへの)不安なことは何ですか」については自由記載で回答してもらった。

実習後の質問紙では「子どもは好きですか」、「子どもと納得のいく関わりができましたか」、「保育所実習での子どもとの関わりに対する不安は解消されましたか」について尋ねた。

実習前・後の対児感情の変化については花沢⁶⁾の「対児感情評定尺度」を使用した。この尺度は子どもに対する肯定的な感情を示す接近感情14項目と否定的な感情を示す回避感情14項目から構成されており、1点~4点を配した4件法で回答を得た。

4. 分析方法

統計解析はSPSS Statistics 28.0を使用した。子どもへの思いや実習への不安感については単純集計を行い、実習前後の対児感情の各項目については対応のあるt検定を行い、有意水準は5%未満とした。また、接近感情と回避感情の拮抗する感情を示す「拮抗指数」(回避得点/接近得点×100)を求めた。拮抗指数は接近得点と回避得点との相克度を表し、0-100の幅をとる。相克度は肯定的な感情と否定的な感情の2つの感情が同時にどの程度抱えて対立しているのかの指標となる。数値が低いほど感情の対立が弱まることを示す。

5. 倫理的配慮

本研究は、A大学の倫理委員会の承認を得て実施した(令和5年7月25日:第1893号)。調査開始前に研究の趣旨と研究への参加は任意であること、研究に参加しない場合でも不利益は生じないこと、成績には一切影響しないことを文書および口頭で説明をした。また、研究目的以外でデータを使用しないこと、研究結果は個人が特定できないよう配慮し論文や学会で公表することを説明した。同意書によって意向を確認し、同意が得られた看護学生を対象に実施した。

Ⅲ. 結 果

保育所実習をおこなうA大学3年次看護学生71人のうち46人から実習前後の回答を得た(回収率64.8%)。うち、両データに不備のなかった40人分の回答を分析対象とした(有効回答率56.3%)。

1. 保育所実習前の調査結果

「子どもは好きですか」について「はい」と回答した看護学生は38人(95.0%)、「いいえ」は2人(5.0%)であった。「日ごろ幼児と関わる機会がありますか」に対して「毎日」と回答した看護学生が0.0%、「ときどき」が12人(30.0%)、「関わらない」が28人(70.0%)であった。「ときどき」を選択した12名の看護学生のうち「弟や妹がいる」と回答した看護学生は1人(8.3%)、「保育施設でアルバイトをしている」と回答した看護学生が4人(33.3%)、その他と回答した看護学生は7人(58.3%)であった。「子どもとの関わりは得意ですか」については「はい」と回答した看護学生が12人(30.0%)、「どちらでもない」が20人(50.0%)、「いいえ」が3人(20.0%)であった。

「保育所実習で不安なことは何ですか」という自由記載のあった看護学生は32人(80%)であった。具体的な記載内容は「コミュニケーションがうまくとれるか、自分が傷つけてしまわないか不安」、「子どもと上手く接することができるか」、「子どもと上手に関われるか」などであった。

2. 保育所実習後の調査結果

「子どもは好きですか」について「はい」と回答した看護学生は100%、「いいえ」は0%であった。「子どもと納得のいく関わりができましたか」に対しては、「はい」と回答した看護学生が12人(30.0%)、「まあまあ」が20人(50%)、「あまりできていない」が8人(20.0%)、「できなかった」が0%であった。「保育所実習での子どもとの関わりに対する不安は解消されましたか」という問いに対して、「はい」が100%、「いいえ」が0%であった。

3. 保育所実習前後における対児感情の変化

対児感情評定尺度28項目の結果を表1に示す。児に対して肯定的な接近感情(14項目)の変化について各項目でt検定を行った結果、「あたたかい」($t=-3.1, p=.004$), 「うれしい」($t=-5.7, p<.001$), 「すがすがしい」($t=-2.3, p=.027$), 「しろい」($t=-3.0, p=.005$), 「あかるい」($t=-3.1, p=.003$), 「たのしい」($t=-2.5, p=.018$), 「やさしい」($t=-4.4, p<.001$), 「うつくしい」($t=-2.7, p=.011$) 「すばらしい」($t=-3.8, p<.001$) について、実習前よりも実習後の方が有意に上昇した。

表 1 実習前後の対児感情の変化

	実習前		実習後		t 値*	p 値
	M	SD	M	SD		
	N=40					
接近感情						
あたたかい	3.4	0.7	3.7	0.5	-3.1	.004
うれしい	2.5	0.9	3.4	0.6	-5.7	<.001
すがすがしい	2.3	1.0	2.8	0.9	-2.3	.027
いじらしい	2.2	1.0	2.2	0.9	-0.2	.860
しろい	1.3	0.7	1.8	0.9	-3.0	.005
ほほえましい	3.6	0.7	3.8	0.4	-1.9	.071
ういういしい	3.2	0.8	3.3	0.8	-1.3	.197
あかるい	3.5	0.6	3.8	0.4	-3.1	.003
あまい	2.1	0.9	2.4	0.9	-1.6	.117
たのしい	3.2	0.7	3.7	0.6	-2.5	.018
みずみずしい	2.6	1.1	2.8	0.9	-1.3	.212
やさしい	2.7	0.7	3.4	0.7	-4.4	<.001
うつくしい	2.5	1.1	2.9	0.9	-2.7	.011
すばらしい	3.2	1.0	3.6	0.6	-3.8	<.001
回避感情						
よわよわしい	2.4	0.8	2.1	0.9	2.2	.034
はずかしい	1.7	0.8	2.0	1.0	-2.6	.014
くるしい	1.3	0.6	1.3	0.6	0	1.000
やかましい	2.4	0.9	2.2	1.0	1.7	.103
あつかましい	1.6	0.7	1.5	0.8	0.4	.660
むずかしい	2.7	0.9	2.6	0.7	0.8	.440
てれくさい	1.8	0.9	2.0	1.0	-1.2	.246
なれなれしい	2.2	0.8	2.5	1.0	-2.0	.051
めんどくさい	1.8	0.9	1.6	0.7	2.0	.048
こわい	1.7	0.8	1.5	0.6	1.8	.078
わずらわしい	1.6	0.8	1.4	0.5	2.0	.048
うっとしい	1.6	0.7	1.4	0.7	1.2	.242
じれったい	1.6	0.7	1.7	0.7	-1.1	.295
うらめしい	1.1	0.3	1.0	0.2	0.4	.660

*対応のある t 検定
M=mean, SD=standard deviation

また、児に対して否定的な回避感情（14 項目）の変化について各項目で t 検定を行った結果、「よわよわしい」（t=2.2, p=.034）と「わずらわしい」（t=2.0, p=.048）の得点が有意に低下した。一方で「はずかしい」（t=-2.6, p=.014）の得点が有意に上昇した。実習前の接近感情の平均得点が 38.2 点、回避得点が 25.4 点、拮抗指数は 67.0 で、実習後の接近感情の平均得点が 43.6 点、回避得点が 24.8 点、拮抗指数は 57.2 で、拮抗指数は有意に低下した（t=5.3, p<.001）。

IV. 考 察

1. 看護学生の属性と子どもとの関わり

i. 好感度の変化

子どもの好き嫌いに関して実習前は「子どもが好き」

が 95% であったが、実習後はすべての看護学生が「子どもが好き」と回答した。先行研究⁷⁾では、対象となったすべての保育学生が演習後に、赤ちゃんや子どもに対する関心が非常に高まり、赤ちゃんや子どもへの感情について「大好き」と回答したことが報告されている。本研究の看護学生においても、実習後はすべての看護学生が「子どもが好き」と回答しており、前掲の先行研究に示されているように、子どもとの肯定的なふれあい体験によって看護学生らが得た感情であった可能性があると考えられた。

ii. 子どもとの関わりを経験

看護学生の 70% が日ごろから子どもと関わる機会がなく、今回の実習で初めて密に子どもと関わった看護学生が多い。そのため、実習前に何らかの不安があると述べ、その中でも子どもとの関わりに関する不安が多くあると分かった。岸川ら⁹⁾は、保育所実習は健康に生活している乳幼児と関わることにより具体的・現実的な子ども像を形成できる効果的な実習と述べている。本調査においても看護学生らは、実際に子どもと密に関わったことで不安が解消したと考えられる。そのことに谷本ら⁸⁾は、子どもと接することに対して持っていた「不安が解消され」、「苦痛が減少」し、「実習が楽しい」と感じると述べている。アンケート調査においても実習後に、実習中の子どもとの関わりに納得感があるかという質問に関して、看護学生のうち 30% が納得したと回答し、50% が「まあまあ」と回答した。実習前の不安について、回答の多くは、子どもとの関わり方について触れていたが、実習前の不安は全員が解消されたと回答している。先行研究¹⁰⁾において、実際に保育士が子どもに接している姿から、看護学生が具体的な子どもへの接し方を学ぶことで、抱えていた不安が解消されたことが報告されている。看護学生らも、実習先で保育士や看護師の子どもに接する姿を目の当たりにしつつ、指導を十分に受けながら子どもと関わり続けた結果、子どもとの関わりに対する不安を解消できたのではないかと考察された。

今後小児看護に携わる可能性のある看護学生たちが、子どもを受容する過程において関連する要因を明らかにすることで、学生指導や評価の視点が明確になり、その後の臨床実践の質にも関連する可能性がある。また宮良の調査¹¹⁾では、対児感情に関して、子どもとの接触体験の少ない学生ほど子どもの抽象的なイメージを有し、接触体験のある学生ほど子どもの行動特性や

関わりの中から感じた感情を具体的にイメージしていたことが報告されている。本研究において、実習前には子どもと関わる機会の少なかった看護学生らが、保育所実習にて子どもとふれあう体験を積み重ねることで、子どもに対してのイメージが鮮明になり、看護学生らなりに納得のいく関わり方を体得していった可能性が高いと考えられた。

2. 実習後の子どもへの接近感情項目得点の有意な上昇

本研究では、「あたたかい」、「うれしい」、「すがすがしい」、「しろい」、「あかるい」、「たのしい」、「やさしい」、「うつくしい」、「すばらしい」の項目で有意な上昇が見られ、保育学生 140 人を対象とした先行研究¹²⁾では、「あたたかい」、「うれしい」、「しろい」、「あかるい」、「やさしい」、「すばらしい」の項目で有意な上昇が見られた。

「うれしい」の項目での上昇理由として、看護学生が保育所の子どもたちと関わる中で受け入れられる体験をしたこと、「しろい」の項目での上昇理由として、表面的形態的な印象を受けた(肌の白さや透明感など)可能性があったこと、がそれぞれ考察された。また、「うつくしい」、「すばらしい」の項目での上昇理由として、看護学生らが成長の著しい過程をたどる子どもの様子を数日間、間近で観察・対峙し、その愛らしさや潔さ(広辞苑第7版)¹³⁾を「うつくしい」と体感・実感した帰結ではなかろうかと考察した。

看護学生らが保育所実習における子どもとの相互的関わりを通して、「あたたかい」や「たのしい」等、実習後の接近感情項目得点に有意な上昇がみられ、今後の小児領域での臨地実習や看護実践にむけて、子どもへのポジティブな印象が形成されたといえる。

3. 実習後の子どもへの回避感情項目得点の変化

本研究では、実習前から回避感情項目は低い看護学生が多く、実習後にはさらに低下し、「はずかしい」の項目のみが有意な上昇を見せた。

i. 有意に低下した項目に関して

「よわよわしい」では、子どもが体調を崩さず活発に活動している様子を看護学生らが目の当たりにしたことで、子どもに対する身体的なよわよわしいイメージが低下したと考える。また「わずらわしい」では、子どもは生活や遊びの側面において、看護学生らが想像していたよりもはるかに自立し、他児や看護学生と

良好なコミュニケーションをとり、保育士の指示が通り、世話が掛からない様子を目の当たりにしたことでわずらわしいイメージが低下したと考えた。先行研究¹²⁾においても、保育学生の回避感情が子どもとのふれあい体験後に有意に低下し、拮抗指数も子どもとのふれあい体験後に有意に低下したことが示されている。看護と保育で学科は異なっても、子どもとのふれあいにより、学生らの子どもへの回避感情が有意に低下することが分かった。

ii. 有意に上昇した項目について

「はずかしい」の上昇には子どもの思いもよらぬ言動や行動(以下、ふざけ行動)に対する羞恥心を感じたことが上昇の要因だと考えられる。堀越ら¹⁵⁾は、子どものふざけ行動は、子どもが仲間との関係が不安定な緊迫状態を緩和したり、仲間との安定した関係を強化したりする場合に使用されると述べている。子どもとの関わりが少ない看護学生が、子どもと関わる中で、直接的にふざけ行動を受けたことにより、恥ずかしさを感じた可能性は考えられる。子どものふざけ行動は「情動行動」から「理性行動」への発達の未熟さに起因する。今後、小児看護を展開するうえで子どもの成長発達状況は必ず考慮しなければならない側面である。今回の保育所実習において、看護学生が実際に子どもとふれあい、子どもへの感情の変化を体感できたことは今後、看護学生が子どもの身体的・心理的成長発達状況を捉えた看護実践を遂行するための糧となりうる。

4. 保育所実習の効果

藤井ら¹⁶⁾は中学2年生 81 名を対象にした調査で、対児感情の回避得点が子どもとのふれあい体験後に有意に低下したと関連して拮抗指数が有意に低下したと報告している。本研究においても、看護学生の接近得点の有意な上昇および回避得点の有意な下降に関連して拮抗指数が有意に低下したことが示されたことから、子どもとふれあう体験は、青年期の看護学生にとって対児感情の拮抗指数の低下、すなわち子どもに対する感情の対立を和らげると考察できた。

子どもとの関わりへの不安解消や自身の達成感の体験は、看護学生の子どもの接近感情の上昇と回避感情の低下に繋がり、今後の子どもと関わる機会へ前向きな体験となりうる。先行研究¹⁷⁾において、病院以外の地域の教育・福祉施設を含んだ施設での小児看護学実習で、看護学生は、病院での実習と同様に小児看護

の実習目標であった対象の理解と看護の役割を学ぶことができていた。このことから、青年期にある看護学生らが多様な子どもたちと関わる経験をする中で、子どもとの関わりへの心理的ハードルが下がると考えられた。

V. 結 論

本研究では、看護学生が保育所実習を通じて、子どもに対する感情や関わり方にどのような変化が生じたかをアンケート調査を通じて明らかにした。結果、実習前と比べて実習後は看護学生の接近感情はすべての項目で上昇し、「あたたかい」「うれしい」などの9項目が有意に上昇した。回避感情に関しては「よわよわしい」「わずらわしい」の項目が有意に下降した。また、子どもとの関わり方に対しても、実習後は全員が「不安なし」「子どもが好き」と回答した。保育所実習を通して、看護学生らの子どもに対する感情や関わり方にポジティブな変化がみられ、今後の臨地実習や看護実践に向けて、前向きな姿勢が形成された。

研究の限界

本研究の対象は1大学のみの看護学生を対象としており、事前の調査でも子どもが好きと回答した学生が95%いる集団で、実習に対するネガティブな体験を回答しづらかったことも推察されることから、研究結果および知見の一般化には限界がある。

謝 辞

本研究にご協力いただきましたA大学3年次の看護学生の皆様に感謝いたします。

利益相反

この研究に関して、企業等との関わりや、研究結果や参加者の保護に影響を及ぼす可能性のあるすべての経済的利益関係等の利益相反の状況はない。

各著者の貢献

浅野梨子と涌水理恵は、研究の着想と計画、データの取得、分析、執筆に実質的な貢献をし、佐々木啓太と谷口育と葛西茉莉聖と川崎公暉は分析と執筆に貢献をした。全員が論文の知的内容を執筆（改訂）し最終版を承認している。

文 献

- 厚生労働省. “2022（令和4）年国民生活基礎調査の概況”. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/index.html>（参照 2024.07.01）
- 笠井由美子, 小野敏子, 木村紀子. 小児看護学実習における戸惑いに対する学生の対処行動とその要因乳児および幼児期前期との関わりに焦点をあてて. 小児看護学会誌 2011; 20(1): 148-154.
- 扇原貴志, 村井潤一郎. 大学生の子どもへの関心とその関連要因. 子育て研究 2012; 2: 3-12.
- 舟島なをみ. 看護学教育における授業展開一質の高い講義・演習・実習の実現に向けて. 1. 東京: 医学書院, 2013.
- 厚生労働省. “看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン”. https://www.mhlw.go.jp/kango_kyouiku/_file/1.pdf（参照 2025.02.17）
- 花沢成一. 母性心理学. 1. 東京: 医学書院, 1992.
- 長沼貴美, 佐藤美香, 二村文子, 他. 乳児保育演習に参加した保育者をめざす学生の体験からみえてくるもの. 創価大学看護学部紀要 2021; 6: 15-22.
- 谷本公重, 猪下 光, 尾形美智子. 看護学生の幼稚園・保育園実習前後における子どもへの認知とイメージの変化. 香川医科大学看護学雑誌 1999; 3(2): 7-14.
- 岸川亜矢, 田村佳士枝. 小児看護実習前の保育所実習の経験の効果～保育所実習を経験した学生と経験していない学生のアンケートの比較から～. 千葉県立衛生短期大学紀要 2004; 19(1): 7-14.
- 高橋恵美子, 高梨信子. 臨地実習による看護学生の子どもに対する関心の変化（1）—好感度調査からの考察—. 島根県立看護短期大学紀要 2000; 5: 59-63.
- 宮良淳子, 神徳規子. 小児看護学実習前の学生が持つ対児感情と親性準備性. 中京学院大学看護学部紀要 2013; 3(1): 29-41.
- 井田史子, 前田隆子, 鈴木恭子. 幼児教育保育学科学生の乳幼児保育学習による親性準備性の変化（第2報）. 鳥取短期大学研究紀要 2017; 75: 11-20.
- 新村 出. 広辞苑. 7. 東京: 岩波出版, 2018.
- 園田 希, 高畑香織, 堀内成子. 乳児との対面接触による妊婦の対児感情と不安への効果: ランダム化比較試験. 日本看護科学会誌 2021; 41: 449-457.
- 堀越紀香, 無藤 隆. 幼児にとってのふざけ行動の意味—タプーのふざけの変化—. 子ども社会研究 2000; 6: 43-55.
- 藤井志保, 今川真治, 鈴木明子, 他. 幼児ふれあい体験における積極的対児行動を促す指導方法に関する

1) 厚生労働省. “2022（令和4）年国民生活基礎調査の

る研究 (1). 広島大学学部・附属学校共同研究機構
紀要 2012; 40: 106-110.

で行う小児看護実習の学びの特徴. 東京情報大学研
究論集 2022; 25(2): 45-54.

17) 水野芳子, 西村あをい, 村上洋一, 他. 多様な施設

[Summary]

The purpose of this study was to clarify how nursing students' feelings toward children change through the A University Pediatric Interaction Practicum (hereafter referred to as "practice at nursery"). Seventy-one nursing students who participated in the practice at nursery were asked to participate in this study, and 46 of them consented to complete a self-administered questionnaire survey before and after the practice at nursery. The results of the analysis of 40 students (valid response rate: 87.0%), for whom data were available before and after the practice at nursery, showed that 95% of the nursing students answered "yes" to the question "Do you like children?" before the practice at nursery and all answered "yes" after the practice. All of the nursing students answered "Yes" to the questions "Did you have a satisfactory relationship with the child?" The mean scores of the nursing students' ratings on the scale of feelings toward the child increased significantly for the approach feelings "warm," "happy," "white," "bright," "kind," and "wonderful," decreased significantly for the avoidance feelings "annoying" and "bothersome," and increased significantly for the avoidance feeling "embarrassing," indicating a significant decrease in the antagonism index. The antagonistic index decreased significantly. The experience of interacting with children through nursery practice was considered to have reduced the antagonistic index of feelings toward children for the adolescent nursing students, i.e., it softened their emotional conflicts toward children. In addition, the nursing students showed positive changes in their feelings toward children and in the way they interacted with them, and this can be interpreted as the formation of a motivated attitude toward future on-site training and nursing practice in the pediatric field.

Key words: Nursing Student, Pediatric Nursing Practicum, Emotions toward Children, Nursery Practice